留学を終えて

岐阜高等学校　市川　竜太郎（エストニア共和国）

エストニアへの留学にあたり多大なご支援を頂き、ありがとうございました。ちょうど2週間ほど前に無事帰国しました。おかげさまで、この一年間、とても貴重な経験をすることができました。そのささやかなお礼として、留学生活で得た新たな知見や経験を特に教育や国民性についてこの報告書で皆さんと共有したいと思います。

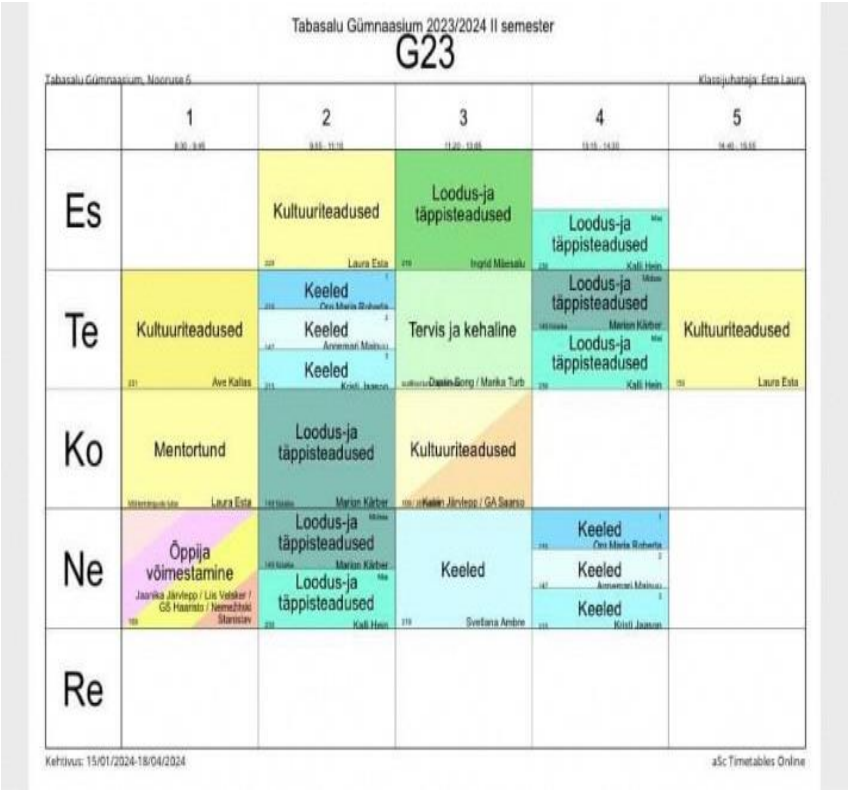
校舎の写真

私は、エストニア留学中、首都タリン郊外の Tabasalu という町でホストファミリーと暮らしながら、Tabasalu Gümnaasium という学校に通っていました。その高校は、創立2年目の非常に新しい学校で、校舎や学校の設備が新しいのはもちろんですが、学校のスタイルや校風など細部までかなりリベラルで、様々な発見がありました。例えば、金曜日はプログラミング、映画製作、サイバーセキュリティから一科目のみ選択し、その一科目のみを 1 時間受け、時間割の変更や宿題の連絡はすべて「Stuudium」という教師、生徒、親が使う同一のプラットフォームで行われるなど、日本の学校とは全く違う学校生活でした。それに加え、部活もなく、学校も基本3時頃に終わるため、基本的に多くの自由時間があったため、そのような選択科目を追求できる時間が多くありました。

このようなリベラルな校風と同一のプラットフォームにより、生徒の自主性や創造性を最大限活かすことができるため、生徒主導で様々な創造性に富んだ研究活動や校内イベントが行われました。私は、日本文化イベント（日本文化ビンゴ大会）を校内で開きました。その際も、「Stuudium」で、このイベントを開催するための運営メンバーを募集したり、先生や生徒会のメンバーと日程や場所、広告などの調整を素早く行ったりすることができました。また、そのイベントに対する参加フォームも Stuudium で管理することができたため、非常に効率的に準備を行うことができました。私のチームメンバーには金曜日にプログラミングや映画製作を選択している人がいましたので、その方たちにビンゴに必要なビデオ及びビンゴの得点の集計のためのプログラミングコードを書いてもらいました。

このような実質週4日制や同一プラットフォームによる情報管理の一元化は、生徒の学びたいことを追求し、生徒のアイデアを創造できる環境を生み出すことに非常に役立つと私は感じました。それと同時に、このような環境を実現・維

持するために、学校側が様々な取り組みを行っていることにも気づきました。特に、学校側が最も力を入れていると感じたのは、機会の提供です。私の通っていた高校は、簡単なテストを受ければ誰でも入ることができます。そのため、生徒の大半は、自分が探求したい分野がまだ見つかっていません。仮に多くの自由時間があったとしても彼らからすればそれらの時間を、何を探求するために使えばいいのかわからず、それらの貴重な時間を浪費してしまいます。そこで、学校では 1 年生の頃から、様々な分野で実際に働いている人や学者などを学校に招いて行われる講演会やワークショップが月に 5 回ほど開かれていました。これらの講演会に参加した後には、それに関連した授業時間に変更されることが多々ありました。例えば、無声映画の製作に携わり、エストニアのロックバンドのメンバーであった方の講演後には、4 時間ほどの時間割が変更されました。その時間には、実際に無声映画を撮影し、その分野に関する知識を増やすだけでなく、実際に触れてみることで、貴重な経験を得ることができました。このようにして、学校は生徒に対して各自が追求すべき、または探求したいと思う分野を発見させることを目的とした場を多く提供し、生徒の創造性を最大限伸ばすことのできる環境を作り上げているのです。当然、生徒に対する強制力が不十分であったり、自由時間が多すぎて、生徒が十分にその時間を有効活用できていなかったりなどの問題点がありますから、一概にこの教育システムを賞賛することはできません。しかし、私は、日本とはまったく異なる教育システムの上で一年間過ごすことができ、新しい視点や教育に対する新しい知見を得たことが大きな収穫だったと感じます。



時間割表

最後に、エストニア人との思い出について記しておきます。エストニア人は、非常に人見知りで内気な国民性だと言われることが多く、初対面の人には冷た

い印象を与えがちです。私も入学後３か月ほどは、誰に質問しても「Ma ei tea（知らない)」という答えが返ってきて戸惑いました。彼らは、自分の名前や誕生日も個人情報だと考えているようで、３か月ほど一緒に過ごしてようやく相手の名前を聞き出すことができました。ランチの時間には、５人ほどで集まって食事をするものの、ほとんど誰も話しませんでした。正直、もし私が３か月ほどしかエストニアに住まなかったとしたら、彼らのことを世界一冷たく内気な国民と揶揄していたかもしれません。しかし、１０か月ほど生活してみると、私は、彼らの心の中にとても温かい暖炉が隠されていることに気づきました。例えば、冬の寒い朝、バス停で凍えていた私に、ある日見知らぬエストニア人の女性が、自分の手編みのマフラーを差し出してくれました。彼女は「Külm on, eks?（寒いでしょう？)」と言い、微笑みました。そのマフラーの温かさだけでなく、彼女の心の温かさが伝わり、涙が出そうになったのを覚えています。また、学校の友人たちと初めて過ごしたクリスマスも忘れられません。彼らは自分たちの家族の一員のように私を迎え入れ、自家製の伝統料理を振る舞ってくれました。キャンドルの灯りがともる中、エストニアの古い民謡を一緒に歌い、心からの笑顔で過ごした夜は、一生の宝物です。また、ある日、エストニアの美しい森を散策していると、近所のおじいさんが声をかけてくれました。彼は自分の家に招待し、自分で採ったベリーと、手作りのジャムを振る舞ってくれました。彼の話す古いエストニアの物語に耳を傾け、その静かで深い言葉に感動しました。また、冬の夜、クラスメートの家に招かれ、サウナと雪の中を行き来するという、エストニア独特の体験をさせてもらったことも忘れられません。サウナの中で、私たちは無言でお互いの存在を感じ、そして雪の中に飛び込む瞬間、みんなの笑顔が一層輝いて見えました。彼らと共有したその時間は、言葉を越えた絆を築くきっかけとなり、私はエストニアの人々の真の温かさを知ることができました。

エストニア人の心はまるで冬の湖のようです。一見すると冷たく静かに見えるかもしれませんが、その奥には深く澄んだ温かさが広がっているのです。彼らとの出会いや触れ合いが、私の心に温かい灯火をともしてくれました。こうして振り返ってみると、エストニアで過ごした時間は、私にとって何にも代えがたい宝物となりました。この地で出会った人々との思い出が、これからも私の心を温め続けてくれることでしょう。